クリエイティブツーリズムによる過疎地域の持続的発展
― 珠洲市におけるアートツーリズムの可能性 ―

Sustainable Development of Depopulated Areas through Creative Tourism
— Possibility of Art Tourism in Suzu City —

竹　谷　多賀子
TAKEYA Takako

＜目　　次＞

Ⅰ．はじめに―先行研究と検討課題
Ⅱ．珠洲市がアートツーリズムに取り組んだ背景
　(1) 珠洲市における維持可能な社会に向けた取り組み
　(2)「能登里山里海マイスター育成プログラム」の取り組み
　(3) SDGs未来都市の取り組み―「SDGsラボ」の始動
　(4)「奥能登国際芸術祭」とアートツーリズムへの取り組み
　(5) 第2回目の開催「奥能登国際芸術祭2020＋」の成果
Ⅲ．アートツーリズムは地域の持続的発展に貢献するか？
　(1) アンケートの目的と調査方法
　(2) アンケート調査結果
　(3) インタビューの目的と調査方法
　(4) インタビュー調査結果
Ⅳ．まとめに代えて―残された課題

Ⅰ．はじめに―先行研究と検討課題

本研究は，「クリエイティブツーリズム（創造的観光）」の観点から地域における持続可能な発展ついて考察し，新たな文化観光政策への視座を得ようとするものである。

近年，観光の新たな概念として「クリエイティブツーリズム（創造的観光）」が注目を集めており，ユネスコが推進する21世紀型の観光モデルとして，欧米をはじめ世界各地で急速に関心が広がっている。

クリエイティブツーリズムとは，日本における創造都市論の第一人者である佐々木雅幸によれば「マスツーリズムの弊害を避け，地域固有の文化資源を生かした新しいタイプのツーリズムであり，ツーリストと地域住民とが感動や体験を共有することにより新たな価値を生み出し，地域の持続的発展に貢献するものである」と定義されている（佐々木，2017）。もともとクリエイティブツーリズムは，2000年に，ニュージーランドの観光コンサルタントであるクリスピン・レイモンド（Crispin Raymond）と国連世界観光機関（UNWTO）のグレッグ・リチャーズ（Greg Richards）によって定義されたものであった。また，2008年，ユネスコ創造都市ネットワークと米国ニューメキシコ州サンタフェ市共催による「第1回クリエイティブツーリズム国際会議」においては，「本物のアート，文化遺産，特別な場所において参加型の学習を通じた本物の体験を得る観光」と定義されている（Wurzburger，2010）。

さらに，国際経済全般について協議することを目的とした国際機関であるOECDは2014年「ツーリズム＆クリエィティブエコノミー」を提出し，創造経済（クリエイティブエコノミー）と観光分野との融合の強化と，文化観光の発展形としてクリエイティブツーリズムの推進を提唱している（OECD，2014）。このように，観光と創造経済・創造都市という概念が組み合わされて，世界各地においてクリエイティブツーリズムの取り組みが広がっている。たとえば，世界的にクリエイティブツーリズムの先鞭をきってきたサンタフェ市は，ユネスコ創造都市ネットワーク（クラフト＆フォークアート分野）のメンバーであるが，アメリカ先住民，スペイン及びメキシコ統治時代の文化を背景とする様々な文化の融合に

もとづくクラフトやフォークアート，現代アートを生かしたクリエイティブツーリズムに取り組んでおり，アーティストと旅行者をつなげるクリエイティブツーリズム専用のウェブサイトをみると，200以上の体験プログラムが展開されている。さらに，日本においてサンタフェと同じくユネスコ創造都市ネットワーク（クラフト＆フォークアート分野）のメンバーである金沢市や丹波篠山市などでもクリエイティブツーリズムの取り組みが進められている。

従来，リチャード・フロリダ（Richard L. Florida）やアラン・スコット（Allen John Scott）など，クリエイティブクラスやクリエイティブ産業の研究者らは，主に大都市がクリエイティブハブであると主張しており，小都市や農村地域の創造的発展は検討対象から除外してきた，これに対して，クリスピン・レイモンド（Crispin Raymond），グレッグ・リチャーズ（Greg Richards）などの「クリエイティブツーリズム」の提唱者たちは，大都市の創造性を強調することは，旅行者が体験したいと思う「日常の創造性」が存在するすべての場所を無視することにつながると批判している。工芸や娯楽，芸術，音楽，そして文学にみられるように地元のライフスタイルに埋め込まれている「日常の創造性」こそ，グローバル化する世界において地域を際立させる創造性の一側面として重視されるものであると主張し，クリエイティブツーリズムのコンセプト形成に影響を与えてきた（Greg Richards,2021）。そして，クリエイティブツーリズムを活用して大都市圏から遠隔の小都市や農村，過疎地においても創造的な地域発展が可能であることを明らかにしてきたのである。

一方，観光の世界的な進展がもたらす環境破壊や伝統文化の破壊，オーバーツーリズムなどの観光公害に直面して，SDGsに向けた地域再生と持続可能な発展や社会問題解決をめざした観光への転換に期待が高まり，さらには2020年以降の新型コロナウイルス感染症拡大を背景として，クリエイティブツーリズムの取り組みは今後意義の大きいオルタナティブな観光の概念として重要性が高まっている。

しかしながら，日本においてクリエイティブツーリズムが，具体的に地方都市や過疎地域にどのような影響をもたらしていくのかという点においては，研究が十分になされたとはいえない。筆者は具体的な地域の事例分析を通じて，この点の解明を試みるものであり，すでに，石川県金沢市を対象として分析（竹谷，2021）を行っているが，本稿では過疎地域の典型として同県の能登半島の最先端に位置する珠洲市を取りあげて，クリエイティブツーリズムの導入的形態としてのアートツーリズム[1)]の視点から地域の持続可能な発展について検討し，新たな文化観光の在り方に光を投げかけるものである。

Ⅱ．珠洲市がアートツーリズムに取り組んだ背景

（1）珠洲市における維持可能な社会に向けた取り組み

石川県珠洲市は，人口1万3,086人（2022年8月31日時点）と本州最小人口の市である。能登半島の先端に位置し，美しく豊かな里山里海に囲まれ，「揚げ浜式製塩」といった古い製塩法や「あえのこと」（新嘗の祭礼），江戸時代から連綿と続くキリコ（切子燈籠）祭りをはじめとした「祭り」など里山里海とともに生きてきた特徴がある。また，地域独自の生業や生活様式，伝統文化が脈々と受け継がれており，希少種をはじめとする生物多様性にも恵まれた市である。

ところが，1980年代に引き起こされた原子力発電所の誘致問題によって，地域社会が21世紀に入ると翻弄され，結果的に原発計画は中止となり，その混乱を乗り越えて自然と文化を重視する方向に歩みはじめた。地域固有の自然と伝統文化に恵まれた点が高く評価され，2011年に珠洲市を含む能登4市5町が新潟県佐渡市とともに「能登の里山里海」がGIAHS : Globally Important Agricultural Heritage Systems（世界農業遺産）に認定された。「里山里海」とは，人間と自然の共生の象徴である。山・里・海が近い能登半島では，山と海の両方からの恵みを受け，生態系や美しい景観を守りながら，独自の伝統文化を育み，農業を基軸に，漁業や林業等，他の生業も兼ねる暮らしぶりが特徴である。例えば，地元の製炭工場では美しい茶道用の炭を生産している。この炭の製法は，山の手入れにはじまり，クヌギを植林後，8年かけて育てて材料を揃え，約2週間の窯焚きを経て長い年月をかけて完成に導く営為である。このように，珠洲市は，多様な自然との関わりのなかで複数の生業を営んできた「生物文化多様性」を備えた地域である。

（2）「能登里山里海マイスター育成プログラムの取り組み

2006年に金沢大学が能登地域への地域貢献事業の一環として，廃校となった空き校舎（旧小泊小学校）を活用した「能登学舎」を開設した。これを契機に，珠洲市は金沢大学との提携により，2007年10月から「能登学舎」を活用して社会人向けの高度人材養成プログラム「能登里山マイスター養成プログラム（現在「能登里山里海マイスター育成プログラム」）」を実施している。このプログラムは，里山里海の豊かな価値を評価し，地域課題に取り組むマインド持った人材の

育成と同時に，自然と共生する持続可能な能登の社会モデルを世界に発信する人材の育成を目的としており，里山里海の生態系サービス，能登の風土と伝統的な農業・農法，地域資源を生かしたブランド戦略，バイオマスや耕作放棄地の新たな活用等であった。受講生は1年間，月2回この学舎で里山や里海の課題を多彩な講師から学び現地調査を行う。この14年間にのべ205名の修了生を輩出している（2020年度時点）。そして，この205名の中には，能登生物文化多様性の保全を地域コミュニティ，能登学舎の研究者とすすめ，2015年の生物多様性アクション大賞を受賞した「まるやま組」を主催する萩のゆき氏等も含まれている。また，里山産業のソーシャルビジネス化や能登の食を核としたスローツーリズムの拠点づくり，耕作放棄地の再生・6次産業化開拓等を展開する人材を輩出している。2014年には，GIAHSサイト間の連携事業として，フィリピンの「イフガオ棚田」との相互交流を支援するなど国際貢献にも力を入れている。

こうした大学連携を地域づくりに活かすプログラムは，人口減少社会という地域課題に対し「里山里海」で変革を促す担い手を創出する取り組みとして期待されている。

しかしながら，市の実態は人口減少と高齢化率が51.7％（2020年国勢調査）と急速に進んでおり，里山里海の景観をつくりあげてきた農林漁業も厳しい現状に直面している。市内には大学など高等教育機関が存在せず，高等学校を卒業し進学を希望する若者は都心部へ流出し，就職する傾向にあり，地域産業や経済の担い手不足が課題となっており，地域経済を取り戻す方策を探っていた。

（3）SDGs未来都市の取り組み―「SDGsラボ」の始動

これらの現状を踏まえ，珠洲市は，2018年3月に先述の世界農業遺産の活用の展開や，これまで取り組んできた大学連携による人材育成事業（能登里山里海マイスター育成プログラム）をさらに発展させるため，研究分野と経済分野のマッチングを加速し，地域と経済をつなぐための拠点「能登SDGsラボ」を開設する事業を中心に内閣府の「SDGs未来都市」選定に向けた提案を行った。そして，2018年6月，珠洲市は内閣府から全国29自治体の一つとして「SDGs未来都市」として選定されることとなる。同年10月に珠洲市の未来都市構想を具現化させる拠点となる「SDGsラボ」を開設し，金沢大学能登学舎（旧小泊小学校）の中に事務局が置かれた。ラボは，珠洲市など七つの組織で運営委員会を構成する。その運営委員会には，珠洲市のほか，金沢大学，石川県立大学，国連大学サステイナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット，石川県産業創出支援機構（ISICO），珠洲商工会議所，興能信用金庫等が参加し，石川県がオブザーバーとして加わる。このラボでの多彩なプロジェクトを通じて，SDGsの達成に向け，産学官が連携し，自然環境を生かした循環型の地域づくりに取り組むことが期待される。具体的には，過疎地域の課題解決に向けた人材育成や，経済・社会・環境の各活動を支え，ネットワーク化を図るプラットフォームとしての役割を果たすだけでなく，市内で実証実験が行われている自動運転技術を生かした「スマート福祉」や世界農業遺産である里山里海の資源を活用した取り組み，更にはSDGsの基本理念でもある「誰一人取り残さない」社会を目指すものとして，珠洲市は「SDGs未来都市」の取り組みを進めてきた。

こうした環境面での取り組みの上に，「奥能登国際芸術祭」を開始して，先端アートプロジェクトにより新たな付加価値の創出や多様なネットワークによって過疎地域の持続的発展へ向けた相乗効果が生まれることが期待されてきた，

（4）「奥能登国際芸術祭」とアートツーリズムへの取り組み

このような機運の中で，地元の商工会議所の会頭と市長のリーダーシップで，「奥能登国際芸術祭」への取り組みが開始された。先述の「SDGs未来都市」の取り組みと「奥能登国際芸術祭」との相乗効果は，過疎地における「維持可能な社会」の実現と多様な創造の場となりうる可能性を有している点で興味深い。

珠洲市は，地理的特質により，古くから大陸からの，また遣唐使や渤海使，北前船等，かつて海上交易が盛んだった時代，各地からの文物や情報が集まる最先端の場所だった。しかし，近代化と陸上交通の発達に伴い，過疎化が進行し，地域が元気を失い「最果ての地」となってしまった。だが，珠洲市には，自然，信仰，祭り，伝承，生業，里山里海の暮らしが累々と層となって蓄積している。そのような珠洲市の歴史や文化，風土を踏まえたアートを創造し，その地の魅力をしっかり伝えるコンセプトのもと，2017年9月，「奥能登国際芸術祭2017」が初めて開催された。総合プロデューサには，「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ」（新潟）や「瀬戸内国際芸術祭（香川・岡山）等を手がけた北川フラムを迎え，市が中心となって商工会議所と共催し，オール珠洲市の実行委員会を組成し開催に至った。過疎地をアートによって元気にする，人口減少に悩む地域の活性化につなげるのが目的だ。また，県内の金沢21世紀美術館との連携にみられるように，金沢市における創造都市の取り組みの土壌があって「奥能登国際芸術祭2017」の流れに結び付いたとも

いえるだろう。

開催期間中，11カ国・地域から39組のアーティストが参加し，空き家や廃線となった旧のと鉄道の駅舎等を会場として，その場から得た発想をもとに多くがサイトスペシフィックな現代アートを展開した。たとえば，金沢美術工芸大学アートプロジェクトチーム［スズプロ］は真鍋淳朗教授を中心に学内の専攻分野を超えた教員と学生たちによるアートプロジェクトチームとして芸術祭を機に結成され，明治期に建てられた古民家を舞台に作品を発表した。その作品の一つである『奥能登曼荼羅』は住民から聞き取った思い出話をもとに，空き家の敷地内にある蔵の内装を絵画的表現で作品に仕立て，珠洲市の自然と文化，営みと暮らしの多様性を織り成し混然一体に描き出している。

この「奥能登国際芸術祭2017」の成果としては，奥能登国際芸術祭実行委員会と珠洲市の調べによると，陸からの視点でみると交通アクセスも悪い，最果ての地であるにもかかわらず，来訪者は50日間で7万1,260人（のべ約39万人）の集客を実現し，市が当初見込んでいた3万人を大きく上回った。また，来訪者に加え，芸術祭を支えるサポーター（722人・のべ1,610人），市内の9～10月の宿泊は前年同期比26%増，日帰りも含めた入り込み観光客数は53%増だった[2)]。観光客だけでなく，アーティスト，大学，金沢21世紀美術館等の関係者が都市部から集まり，賑わいと活気を取り戻すまちの契機となったといえる。

さらに，奥能登国際芸術祭実行委員会は，来訪者や美術関係者それぞれから高評価を得たことに加え，地元住民からも高い評価を得たと述べ，珠洲市は，先端アートを通じて，住民自体が珠洲の自然や文化，生物多様性等の豊かな地域資源の魅力を実感し，域内外の人々と共有することにより，地域への誇りや地域の価値を育てていこうという機運が醸成された，とまとめている。

筆者は，開催期間中に，奥能登国際芸術祭実行委員長の泉谷満寿裕市長との懇談において，先端のアートを通じた地域づくり，地域への誇りや愛着，未来への希望，住民の幸福が育まれる経験と実感を伺うことができた。具体的に，泉谷市長は「『奥能登国際芸術祭』は単なるイベントではなく，『運動』であると考えている。自己実現と地域貢献が混然一体となった珠洲市で暮らすことの幸せを，多くの方に解かっていただきたい。『奥能登国際芸術祭』は，さいはての地から，人の流れ，時代の流れを変えていく運動であると考えている。今後，ここを起点に，市民とともに新たな動きを生み出し，珠洲市の未来を切り拓いていきたいと思う，」と述べている。奥能登国際芸術祭は，会期終了後もそのレガシーを引き継ぎ，アートツーリズムや野外展示，屋内作品の限定公開やパフォーマンスプログラムを様々に展開している。

このように，珠洲市は，これまで自然，文化，景観，環境，生業，コミュニティ等の生物文化多様性を備えた独自の固有価値と大学・教育機関・周辺地域との交流・連携を通じたイノベーションの創出，先端アートを通じた住民の愛着感や誇り，幸福感を醸成し「維持可能な社会」の実現をめざしてきたが，芸術祭を契機としてアートツーリズムへの取組が開始されることになった。

(5) 第2回目の開催―「奥能登国際芸術祭2020＋」の成果

第2回目の開催となった「奥能登国際芸術祭 2020＋」は，新型コロナの影響により，1年延期となったが，2021（令和3）年9月4日に開幕し，当初会期より12日間の延長を経て11月5日までの63日間，珠洲市内 46 の会場で開催した。名称は，2020 に「＋」を追加し，開催年が1年増えるという意味だけではなく，準備期間の 延長をプラスと捉え，当初予定していた芸術祭にさらなる魅力を加える「＋」，コロナ禍に よって生まれた新たな生活様式とそれに対応する新たな芸術祭スタイルの創造によって，来場者への徹底した安全とより多様な楽しみ方を提供する「＋」という意味を込め，新たに 2021 年秋の開催に向け始動した。

会期中における合計来場者数は，48,973人となった。また，居住地別の来場者数は，市内7,936人（17.3%），県内30,341人（66.1%），県外7,604人（17.6%），海外18人（0.0%）であり，県内からの来場者数が7割近くを占めた。さらに，奥能登国際芸術祭実行委員会では，作品鑑賞者数 48,973人を基に，消費を伴わない高校生以下の人数を除き，一人あたりの 消費額を乗じることで直接効果（消費額）を算出している。直接効果は3億4千1百万円であり，波及効果に関しては8千5百万円と推計している。直接効果と間接効果を合わせた経済波及効果は4億2千6百万円となった。

また，開幕時は県内でまん延防止等重点措置の適用期間であったため，措置が解除される9月30日までの間は，ミュージアムと屋外作品を中心に一部公開を制限してスタートし，措置解除後の10月1日以降は全作品を公開した。コロナ禍での開催ということもあり，市民はもとより，作品鑑賞者が安心して鑑賞できるように，マスクの着用，手指消毒，3密の回避など基本的なコロナ対策をはじめ，市内各所に設けた「検温スポット」においては，体温測定，問診，リストバンドの着用を呼びかけ，コロナ感染症対策を徹底し運営した。その甲斐もあり，会期中は新型コロナ感染者が誰一人なく無事

閉幕を迎えることができた。また，感染リスクの低減を図るため，市外，特に県外からのボランティアサポーターの募集を控えざるを得ず，会場準備，作品制作，会期中の受付など，市民や，関係機関からの協力を得て運営を行うこととなり，文字どおり「市民 14,000 人とつくりあげた芸術祭」であったと，奥能登国際芸術祭実行委員会は述べている[3)]。

さらに，当実行委員会は，2017 年の秋に初めて開催された奥能登国際芸術祭は，日本の“さいはて”から最先端の文化を創造する試みとして，国内外から大きな注目を集めることとなった。参加アーティストは，市内それぞれの地域の歴史や文化，特徴をアートで表現し，これまで思うように伝えることができなかった珠洲市の魅力や潜在力を，アートを通して遠く広く伝えることができた。また，今回は，53 組のアーティストが参加し，芸術祭の核ともなる「スズ・シアター・ミュージアム」が整備され，さらに芸術祭の魅力や情報発信力に厚みが増したことにより，今後の珠洲市の移住・定住，誘客に大きな役割を果たす財産になったものと確信している，と付け加えており，アートツーリズムによる地域の持続的発展に期待が高まっている。

Ⅲ．　アートツーリズムは地域の持続的発展に貢献するか?（アンケート調査とインタビュー調査による分析）

以上のように珠洲市では環境保全の取組と近年の奥能登国際芸術祭を契機とするアートツーリズム（クリエイティブツーリズムの導入的形態であり，地域の歴史・文化・芸術への理解を深め，体験することで地元との一体感を持つことを重視する観光のあり方）によって，その地に訪れ関わる人々と住民が交流し，他所ではできないかけがえのない体験や感動を得ることで新たな価値を共有し，移住者の増加につながるなどの成果が見られるが，今後の地域の持続的発展に向けては，地域住民の主体的な参画が不可欠なものと思われる。そこで，本研究では，地域住民に対してアンケート調査とインタビュー調査を実施し，地域住民が2度の奥能登国際芸術祭にどのように関わり，どのような可能性を感じているのか，とりわけ珠洲市が取り組む「アートツーリズム」をどのように受け止めているのかを分析した。

(1) アンケートの目的と調査方法

アンケートでは，地域住民は芸術祭とどう関わっているのか（ボランティア，ツーリズム関連事業等），芸術祭が地域住民にもたらした変化（作品を通じて得た影響），芸術祭の地域活性化への効果について明らかにすることを目的とし，珠洲市において，恒久または仮設アート作品の設置，住民と作家による制作やイベント等の交流やワークショップが行われたエリアの住民に対してアンケート調査を行った。

調査対象として，特に恒久作品を置くエリアならびに住民参加による作品制作を行ったエリアに関しては必須とした（対象地域・人数については珠洲市と相談のもと大谷地区と若山町吉ケ池地区，飯田地区，宝立町柏原校下地区の4か所で行った）。

アンケートの配布方法については，珠洲市と相談のうえ珠洲市の広報誌等に同封して行い，調査実施者は，金沢星稜大学・竹谷研究室（経費負担者）であるが，珠洲市との共同実施の形を取った（実査は，2022年4月から8月。うちアンケートの実施期間は1か月間）。

アンケート調査対象地域[4)] は以下の通りである。

① 大谷地区

荒波と岩場のつづく奥能登の外浦らしいエリア。海岸線沿いに上げは揚げ浜式製塩を営む塩田を見ることができる。毎年4月から5月にかけて，大小さまざま約450本の鯉のぼりが大谷川河口付近を埋め尽くす大谷川鯉のぼり川渡しが，毎年9月第2土曜日と日曜日の2日間には秋祭りが催され，初日には，大谷川沿いの集落を中心に笛や太鼓の鳴り物と共にキリコが練り歩き，2日目には神輿巡行と共に獅子舞いが披露される。奥能登国際芸術祭2020＋（以下「芸術祭2020＋」）では，『時を運ぶ船（2017）[5)]』塩田千春（日本）に加え，『スズ・シアター・ミュージアム「光の方舟」』では，『Soilstory-つちがたり』世界土協会（日本＆シンガポール），『待ち合わせの森』大川友希（日本），『ドリフターズ』OBI（日本），『余光の海』南条嘉毅（日本），『覗いて，眺めて』竹中美幸（日本），『The missing shade59-1 Seascape Untitled』三宅砂織（日本），『静かに佇む』久野彩子（日本），『母音／海鳴り』橋本雅也（日本）が展示された。特に，『スズ・シアター・ミュージアム「光の方舟」』では，珠洲市内の約70軒の家々から集められた民具，日常生活の品々が一堂に集められ，民具と現代アートが融合した劇場型博物館として，アーティストだけでなく，住民が作品に参画した特徴を持ち，住民が真心を込めて来場者を案内する。

② 若山地区

棚田の米作り，伝統行事，さいはてに伝わる農の原風景が広がる。奥能登国際芸術祭のうち，唯一海に面していないエリア。山裾に棚田が連なり，奥能登らしい農の風景が広がる。田んぼの神様を家に迎えて接待し，翌春にまた田んぼに送りかえす「あえのこと」など，毎年の農閑期には，農村の古い伝統的行事が今も行われている。芸術祭2020＋では，『Gravity/この地を見つめる』四方謙一（日本），チームKAMIKURO（日本），『黒い雲の家』カルロス・アモラレス（メキシコ）の作品が展示された。特に，チームKAMIKUROでは，旧上黒丸小中学校，北山集落，南山集落の其々の会場で，「地域社会において忘れかけられた大切なものの再生」をテーマに，唄や踊りの公演やワークショップなど様々な交流プログラムなどが行われた。今回の芸術祭では，これまで深めてきた住民との対話をもとに，美術家，人類学者，映像作家，地域住民がワンチームとなり，活動の成果を集結させた。

③ 飯田地区

陸路と海路の交通要所，古くから政治，商業の中心地。飯田港には今でも県外の船が停留するが，古くから，日本海の他地域と結ばれる商港として多くの船，物資が行き来していた。商店街では，毎月2と7のつく日に「二七の朝市」が行われ，夜はスナック街の灯が明るく点る。前回の奥能登国際芸術祭2017で生まれた，元フェリーターミナルを改装した「さいはてのキャバレー」も新しい飯田のスポットのひとつである。芸術祭2020＋では，『work with #8』今尾拓真（日本），『いのりを漕ぐ』『奥能登曼荼羅（2017）』『いえの木（2017）』『家に潜る（2017）』『こめのにわ（2017）』金沢美術工芸大学アートプロジェクトチーム〔スズプロ〕（日本），『すくう，すくう，すくう』中谷ミチコ（日本），『漂流記』力五山（日本），『石の卓球台第3号』浅葉克己（日本），『小さい忘れもの美術館（2017）』河口龍夫（日本）の作品が展示された。特に，金沢美術工芸大学アートプロジェクトチーム〔スズプロ〕は，2017年の第1回芸術祭を機会に，教員と学生が専門の垣根を超えて結成した総勢60名のチームが地域との交流を深めながら，旧八木家での作品を制作した。

④ 宝立地区

空海伝説で知られる見附島のあるエリア。珠洲随一の観光名所，見附島がそびえ立つ宝立地区。見附島は，佐渡から能登へ渡った弘法大師が「見つけ」たことからその名がついたといわれている。プランクトンを含む地層である珪藻土からなる島で，その見た目から別名「軍艦島」とも呼ばれる。夏になると「デカ曳山」が海岸を通り，「宝立七夕まつり」は，キリコが海中にランプする祭りとしても知られる。芸術祭2020＋では，『綱の小屋』佐藤貢（日本），『😂』ディラン・カク（香港），『珠洲のドリームキンダーガーデン』チェン・シー（中国），『軌間』サイモン・スターリング（イギリス/デンマーク）の作品が展示された。

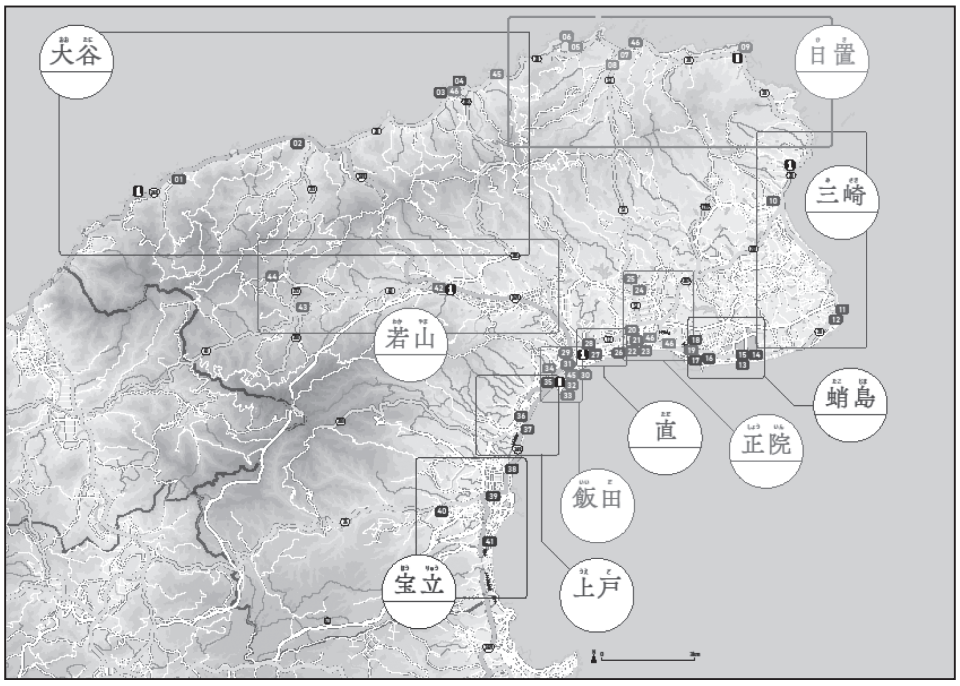

図1　奥能登国際芸術祭2020＋作品展開場所（2021，奥能登国際芸術祭実行委員会）

大谷地区
『スズ・シアター・ミュージアム』

若山地区
『上黒丸　座円　循環　曼荼羅　壱』

飯田地区
『奥能登曼荼羅』

宝立地区
『😂』

図２　奥能登国際芸術祭2020＋作品（筆者撮影）

（2）アンケート調査結果

1）芸術祭への参加形態について

芸術祭への参加状況としては「鑑賞」が48.4％で最も高く，次いで「ボランティア」が34.6％で「仕事（パート・アルバイト含む）」は3.9％であった。また，「参加しなかった」は27.5％であった。

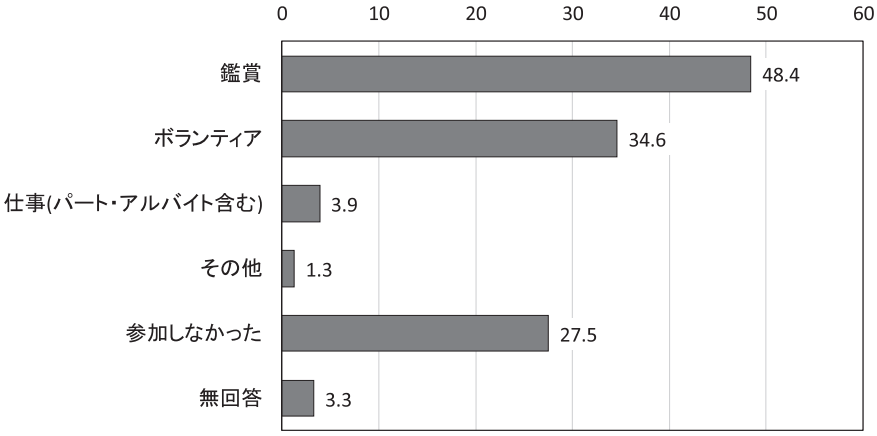

図３　芸術祭にはどのように参加したか

上記で「ボランティア」と回答した者にその活動内容をたずねると「受付／案内業務」が67.9％で最も高く，次に「展示物等の解説」が41.5％，「交通の誘導」「作品制作の支援」が共に20.8％，「イベント等のお手伝い」（15.1％）と続いている。一方，「仕事（パート・アルバイト含む）」と回答した者にその活動内容をたずねると「受付／案内業務」「交通の誘導」「イベント等のお手伝い」が 33.3％となっている。

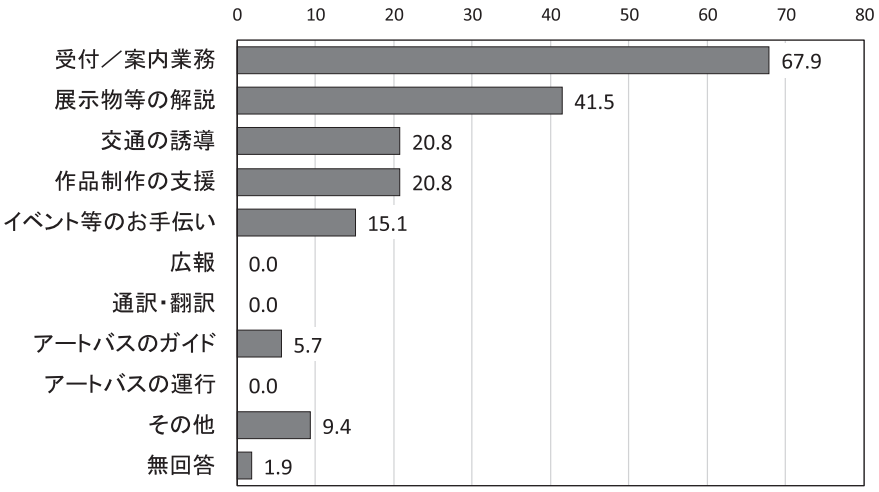

図４　芸術祭ではどのような活動に参加したか（上記で「ボランティア」回答者）

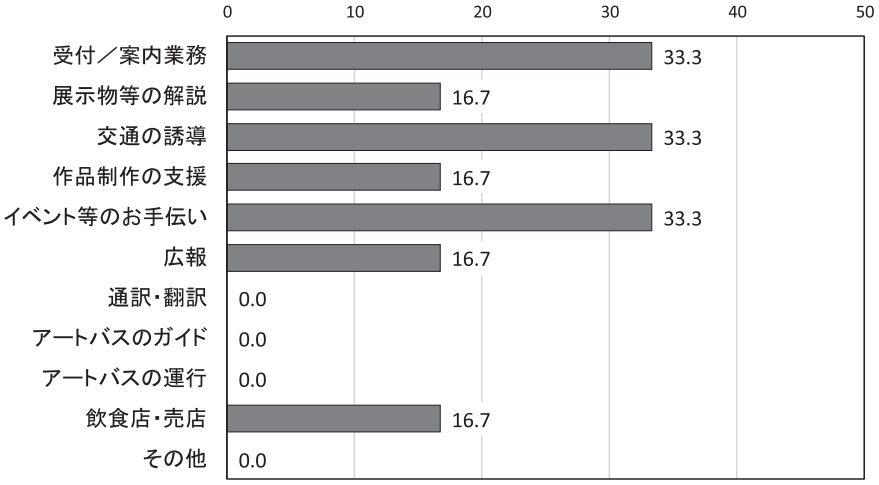

図５　芸術祭ではどのような活動に参加したか（上記で「仕事」回答者）

2）芸術祭に参加した動機・理由について

芸術祭に参加した動機・理由としては「芸術祭自体に関心を持ったから」が33.3％，続いて「地域に役立ちたいから」が30.1％，「アーティストや市外の人との交流」が13.7％となっている。このことから，地域住民が芸術祭に対して主体的な参画意欲をみることができる。

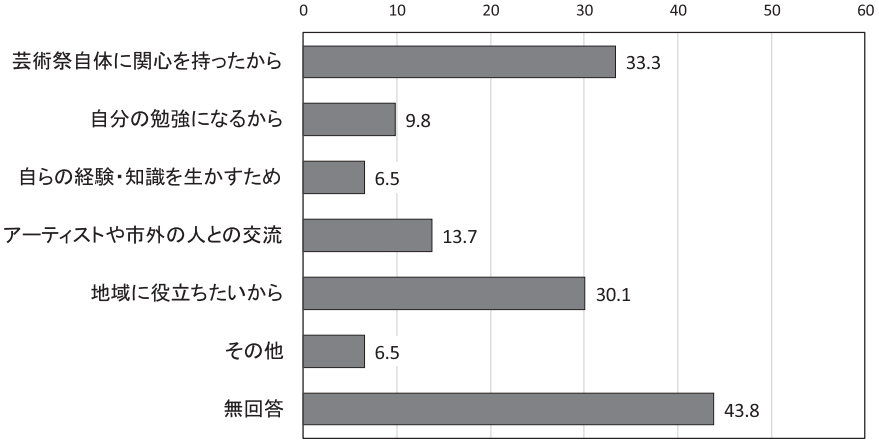

図６　芸術祭に参加した動機・理由

3）芸術祭は移住者や，市外から珠洲市と多様に関わる人びとを増やす契機になったか

芸術祭は移住者や，市外から珠洲市と多様に関わる人びとを増やすきっかけになったかとの問いに「きっかけになった」は73.2％で「きっかけになっていない」（15.0％）を大きく上回っている。このことから，地域住民は，芸術祭を移住や多様に関わる人びとを増やす契機になると捉えていることがみてとれる。

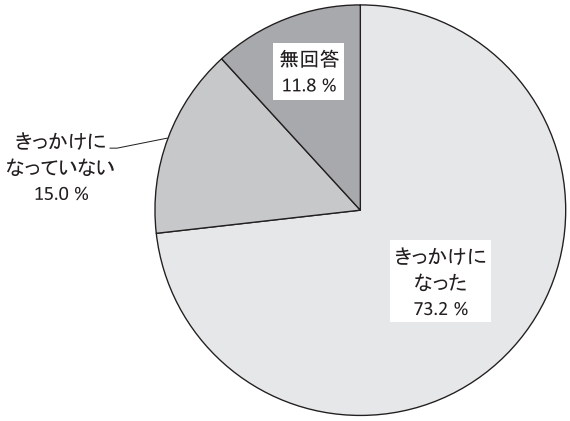

図７　芸術祭は移住者や，市外から珠洲市と多様に関わる人びとを増やす契機になったか

4）今後，芸術祭や珠洲の文化芸術を生かした観光資源を市外向けの観光旅行プログラムの一つとして組み込むことを仮定した場合，組み込みやすいと思われる項目

芸術祭や珠洲の文化芸術を生かした観光資源を市外向けの観光旅行プログラムの一つとして組み込むことを仮定した場合，組み込みやすいと思われる項目は芸術祭に「何らかの形で参加した」と回答した者は「祭り」が57.5％で最も高く，次に「芸術祭」が52.8％となっている。芸術祭に「参加しなかった」と回答した者も「祭り」が47.6％で最も高く，「芸術祭」「伝統文化・歴史」が各々35.7％，「自然環境」が33.3％となっているが，芸術祭に参加した者は，参加しなかった者よりも「芸術祭」を組み込みやすいと思われる項目として挙げる比率が高く，魅力的な観光資源として捉えている。

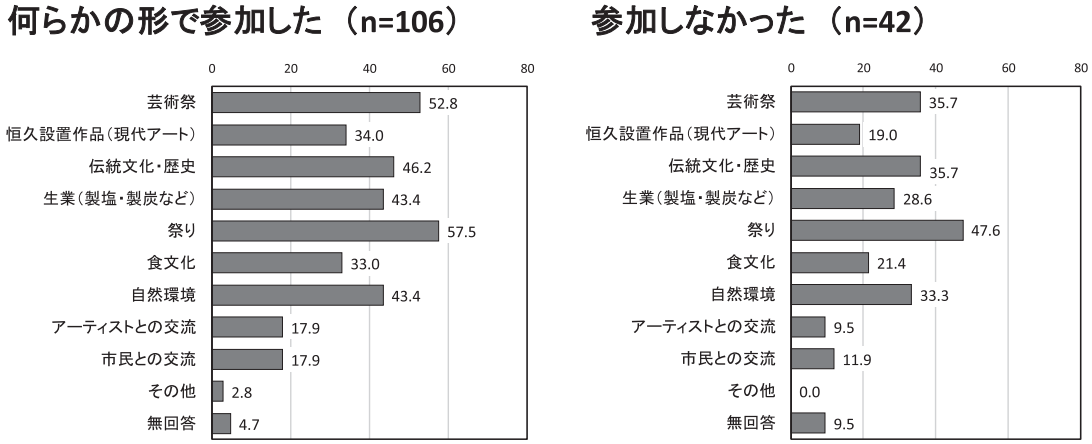

図８　今後，芸術祭や珠洲の文化芸術を生かした観光資源を市外向けの観光旅行プログラムの一つとして組み込むことを仮定した場合，組み込みやすいと思われる項目

5）芸術祭は移住者や，市外から珠洲市と多様に関わる人びとを増やすきっかけになると仮定した場合，芸術祭をきっかけにしたツーリズム（アートツーリズム）の可能性をどう思うか。

芸術祭は移住者や，市外から珠洲市と多様に関わる人びとを増やすきっかけになると仮定した場合，芸術祭をきっかけにしたツーリズム（アートツーリズム）の可能性についてたずねたところ芸術祭に「何らかの形で参加した」と回答した者は「期待する」が83.0％となっており，「期待しない」（13.2％）を大きく上回る結果となった。 芸術祭に「参加しなかった」と回答した者は「期待する」が47.6％，「期待しない」（40.5％）をやや上回った結果となった。このことからも，

芸術祭に参加した者は，今後，アートツーリズムの可能性について大いに期待しているといえる。

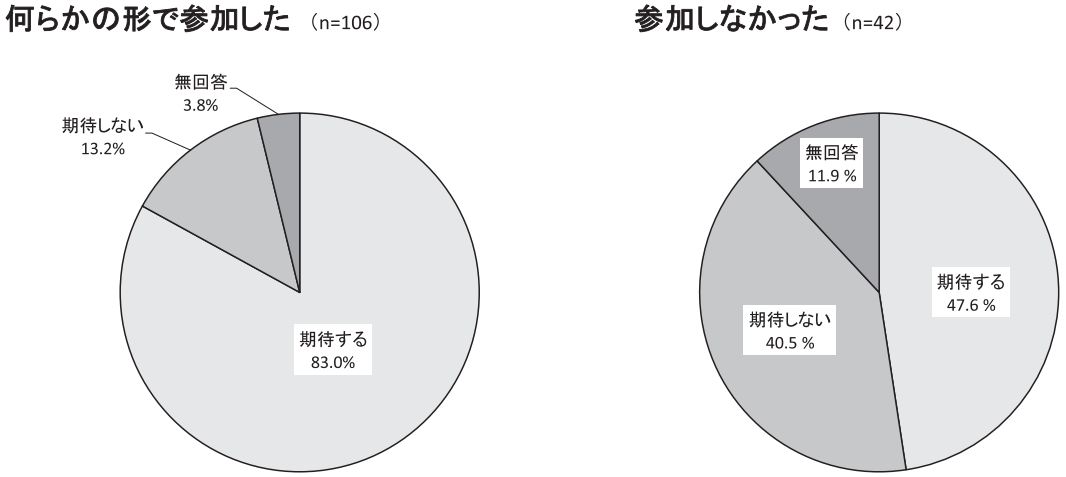

図9　芸術祭は移住者や，市外から珠洲市と多様に関わる人びとを増やすきっかけになると仮定した場合，芸術祭をきっかけにしたツーリズム（アートを活用した観光）の可能性をどう思うか

また，芸術祭をきっかけにしたツーリズム（アートツーリズム）が開催されることにより，経済効果としてどのようなことが期待されるかでは，芸術祭に「何らかの形で参加した」と回答した者は「地域が活性化される」が69.8%，次いで「特産品販売など売上が得られる」が63.2%となっている。芸術祭に「参加しなかった」と回答した者は「地域が活性化される」が47.6で最も高く，「特産品販売など売上が得られる」が40.5%となっており，芸術祭に参加した者と，同じ傾向をみることができるが，芸術祭に参加した者の方が，より期待が大きいと言える。

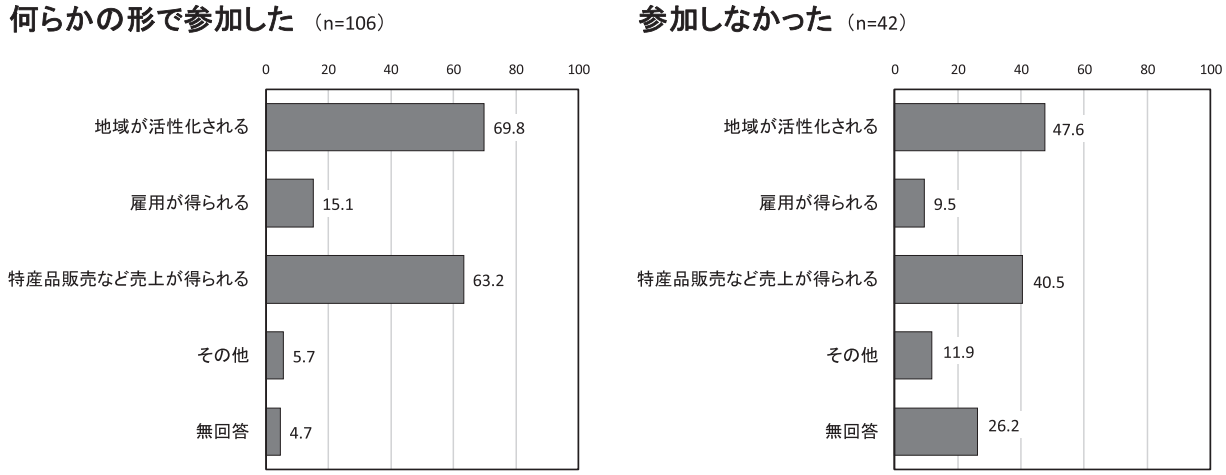

図10　芸術祭をきっかけにしたツーリズム（アートツーリズム）が開催されることにより，経済効果としてどのようなことが期待されるか

さらに，芸術祭をきっかけにしたツーリズム（アートツーリズム）が開催されることにより，社会的効果としてどのようなことが期待されるかでは，芸術祭に「何らかの形で参加した」と回答した者は「珠洲市の魅力を市外に発信すること」が69.8%で最も高く，次いで「市外から珠洲市と多様に関わる人びとが増える」が60.4%，「観光客が増える」が50.9%でこの3項目が半数以上となっている。芸術祭に「参加しなかった」と回答した者は「珠洲市の魅力を市外に発信すること」が47.6%で最も高く，次に「観光客が増える」が45.2%，「市外から珠洲市と多様に関わる人びとが増える」が35.7%となっている。このことから，芸術祭に参加した者と参加しない者とでは，珠洲市の魅力を市外に発信することを第一に期待しているが，芸術祭に参加した者は，観光客の増加よりも，市外から多様に関わる人びとが増えることを期待していることがうかがえる。

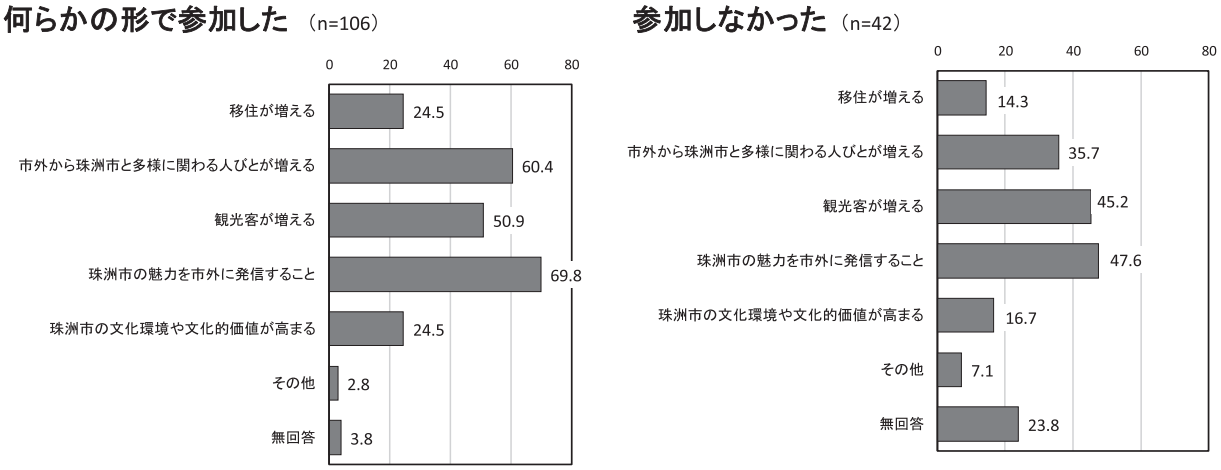

図11　芸術祭をきっかけにしたツーリズム（アートを活用した観光）が開催されることにより，社会的効果としてどのようなことが期待されるか

実際に，今回の芸術祭開催中に新しくお知り合いになった方がいますかの問いに対して芸術祭に「何らかの形で参加した」と回答した者は「いる」は47.2%，芸術祭に「参加しなかった」と回答した者は「いない」が81.0%であった。また，新しくお知り合いになった方が「いる」と回答した者にその方は誰かでは，芸術祭に「何らかの形で参加した」と回答した者は「ボランティア」が56.0%，次に「アーティスト」が40.0%，「観光客」が28.0%となっている。ことからも，芸術祭に参加した者は，芸術祭がきっかけで市内外の住民と話し合い，知り合い，交流が増えていると同時に，アーティストと一緒に作品を制作することで，様々な交流が生まれることがうかがえる。

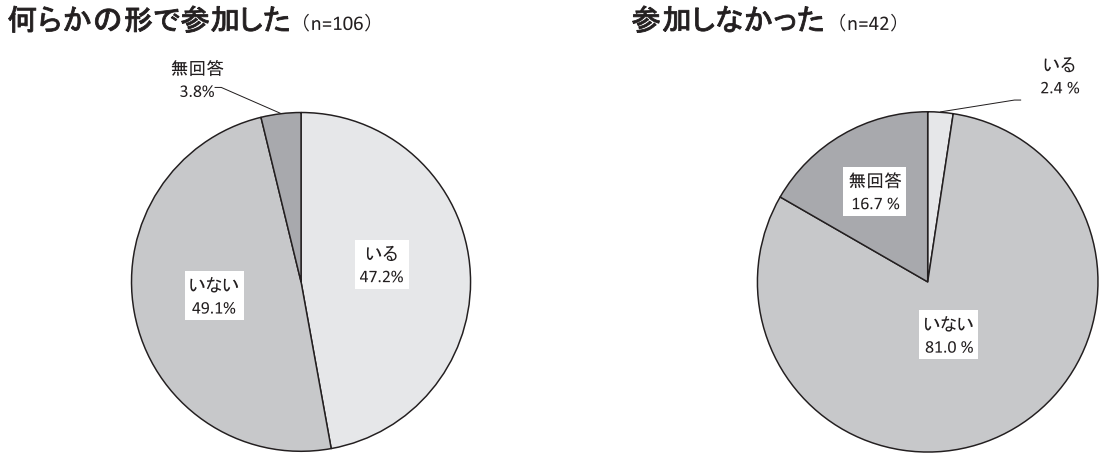

図12　今回の芸術祭開催中に新しく知り合いになった方がいるか

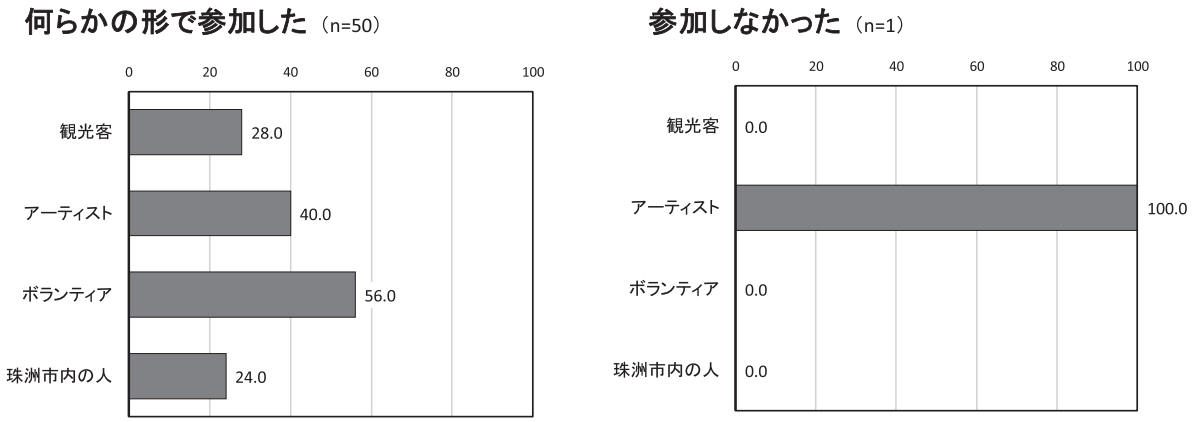

図13　今回の芸術祭開催中に新しく知り合いになった方は誰か

芸術祭をきっかけにしたツーリズム（アートツーリズム）が開催されることにより，経済効果や社会効果が生まれ，珠洲市民は住んでいることの 自信や誇りが高まるかでは芸術祭に「何らかの形で参加した」と回答した者は「高まる」が52.8%，「大きく高まる」（5.7%）を合わせると58.5%の方が「高まる」と回答している。芸術祭に「参加しなかった」と回答した者は「高まる」が26.2%で「大きく高まる」（4.8%）を合わせると31.0%と「高まらない」（26.2%）で芸術祭に「何らかの形で参加した」と回答した者に比べて「高まる」「高まらない」の差は少なくなっている。

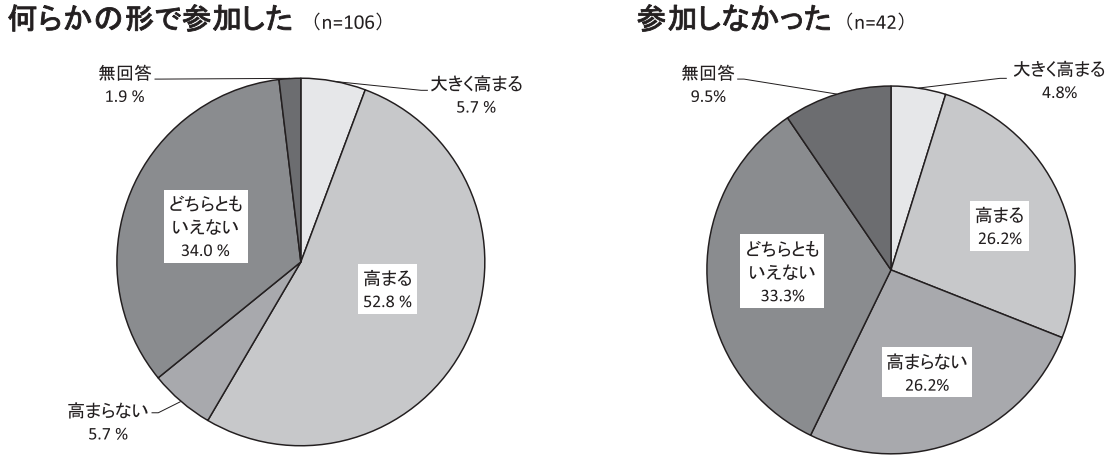

図14　芸術祭をきっかけにしたツーリズム（アートを活用した観光）が開催されることにより，経済効果や社会効果が生まれ，珠洲市民は住んでいることの自信や誇りが高まると思うか

芸術祭をきっかけにしたツーリズム（アートツーリズム）により，珠洲市民の幸福度は向上するかでは芸術祭に「何らかの形で参加した」と回答した者では「向上すると思う」が46.2%で「大いに向上すると思う」（2.8%）を合わせると「向上すると思う」は49.0%と約半数を占めている。芸術祭に「参加しなかった」と回答した者は「向上しないと思う」「どちらともいえない」が共に33.3%で「向上すると思う」（19.0%）を上回っている。このことから，芸術祭に参加した者は，アートツーリズムを契機に市民の幸福度が高まることについて，芸術祭に参加しなかった者よりも肯定的であることがいえる。

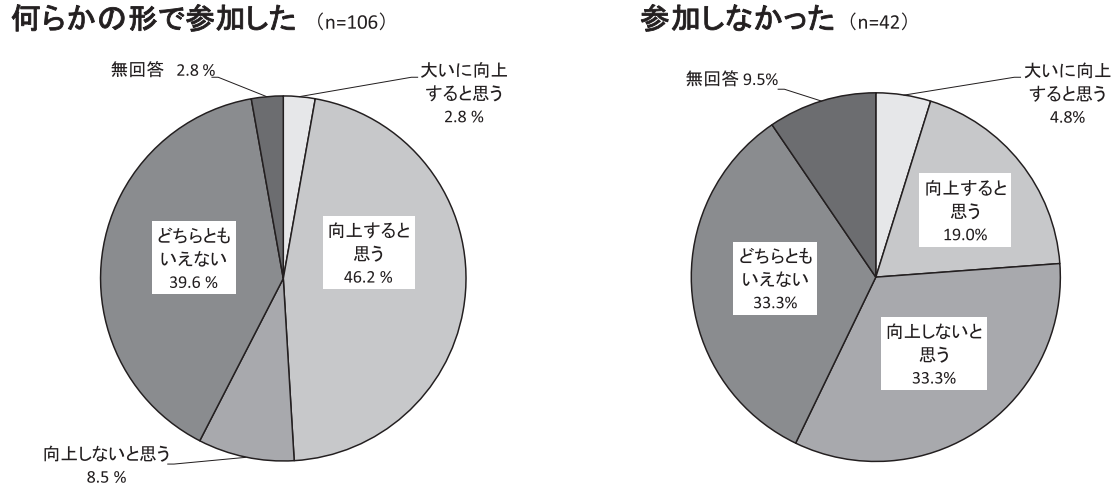

図15　芸術祭をきっかけにしたツーリズム（アートを活用した観光）により，珠洲市民の幸福度は向上すると思うか

また，芸術祭をきっかけにしたツーリズム（アートツーリズム）への参加意向については芸術祭に「何らかの形で参加した」と回答した者は「参加したい」が67.0%で「参加したくない」（22.6%）を上回っている。芸術祭に「参加しなかった」と回答した者は「参加したくはない」は71.4%と7割以上を占め，「参加したい」（11.9%）を上回っている。このことからも，芸術祭に参加した者は，アートツーリズムに対して関心がかなり高いことがうかがえる。

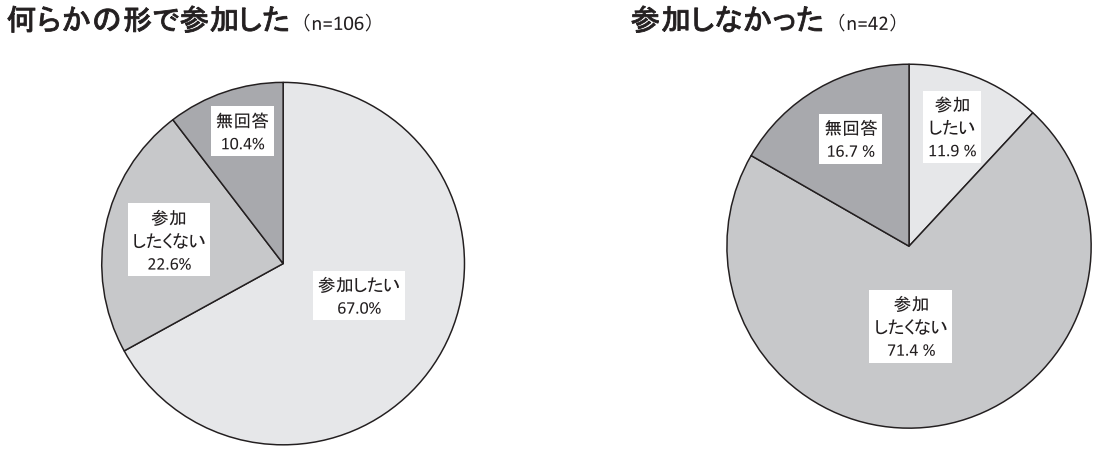

図16　芸術祭をきっかけにしたツーリズム（アートを活用した観光）に参加してみたいか

6）持続可能な地域に向けて

珠洲市での居住意向としては芸術祭に「何らかの形で参加した」と回答した者は「住み続けたい」が69.8％で「ぜひ住み続けたい」（18.9％）を合わせると88.7％の者が珠洲市での居住意向を示している。芸術祭に「参加しなかった」と回答した者は「住み続けたい」が66.7％で「ぜひ住み続けたい」（19.0％）を合わせると85.7％で「何らかの形で参加した」と回答した者とほぼ同じような傾向となった。

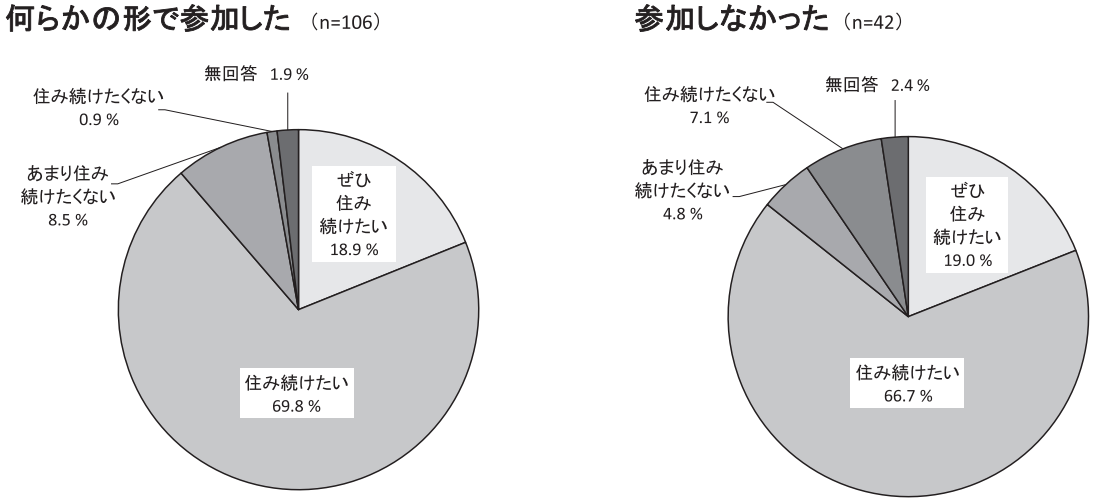

図17　今後珠洲市に住み続けたいと思うか

「持続可能な地域」を意味するものとしては芸術祭に「何らかの形で参加した」と回答した者は「若者の定住」が65.1％で最も高く，次に「雇用の確保」が53.8％，「人とのつながり・連帯」が51.9％，「人口減少からの脱却」が48.1％，「自然との共生」47.2％，「住み続けたい地域」が43.4％で続いている。芸術祭に「参加しなかった」と回答した者は「雇用の確保」が42.9％と唯一40％を超えている。次いで「人口減少からの脱却」が38.1％，「若者の定住」が35.7％，「自然との共生」「防災・安心安全」が各々33.3％であった。

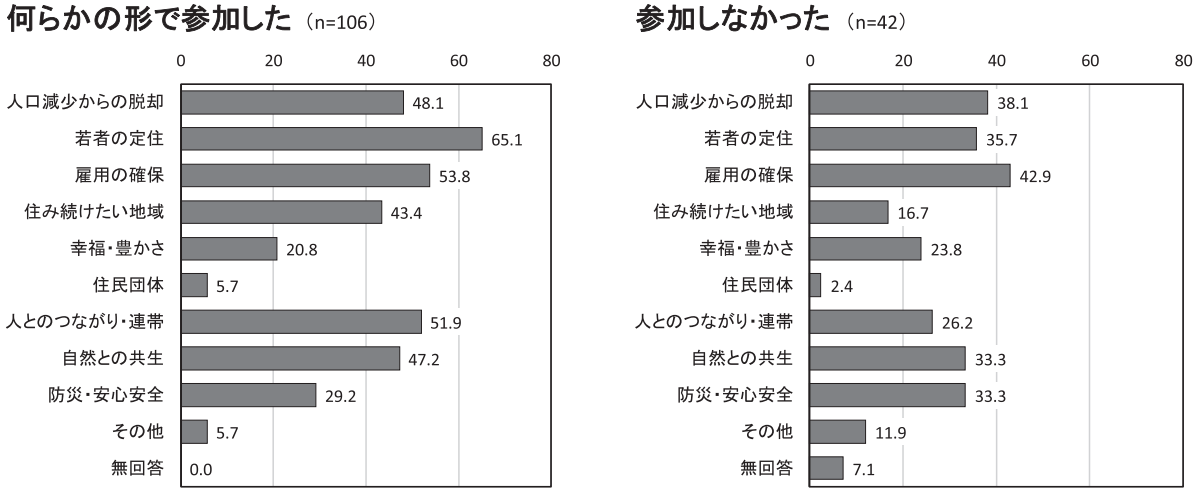

図18　「持続可能な地域」を意味するものは何ですか

7）属性

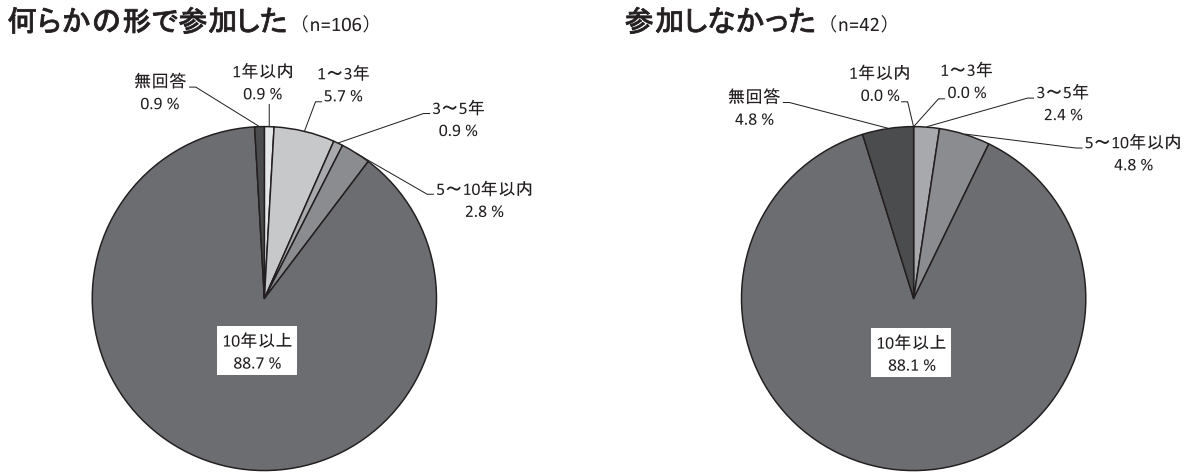

図19　珠洲市に住んで何年か

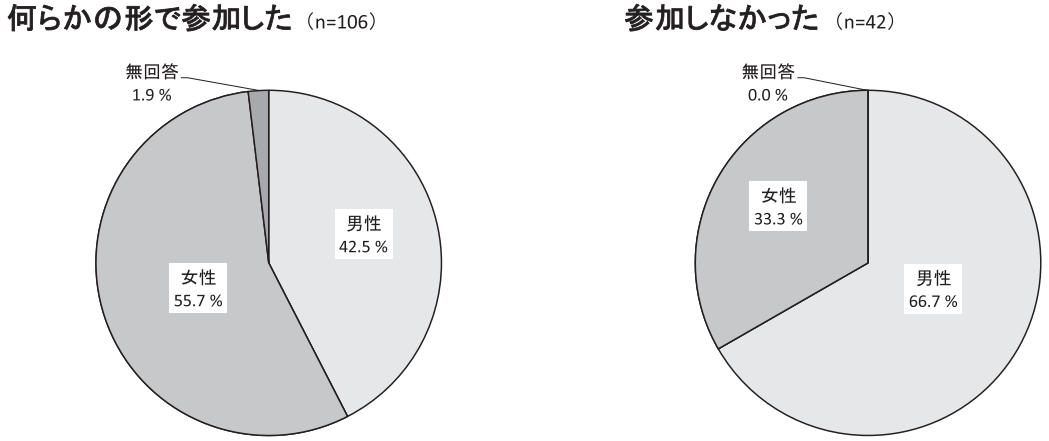

図20　性別

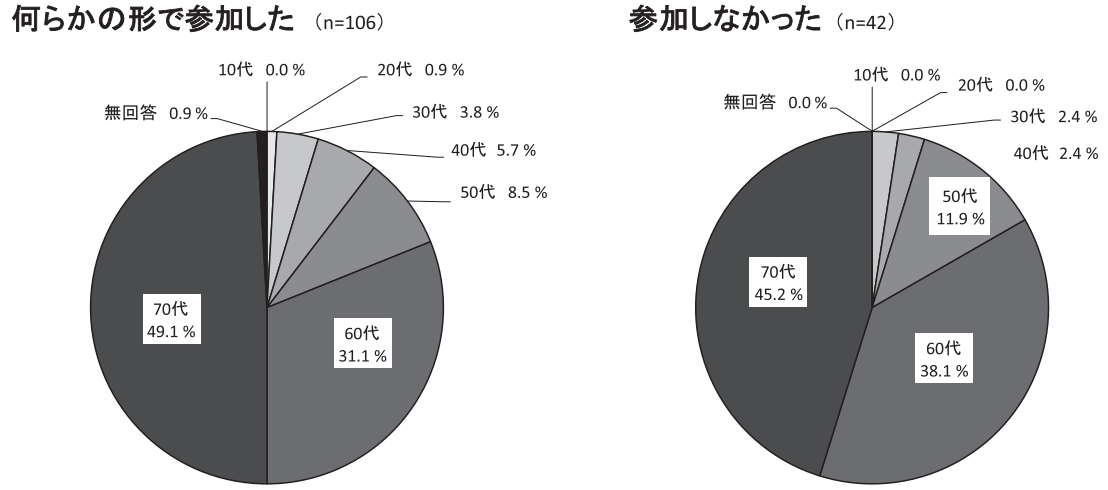

図21　年齢

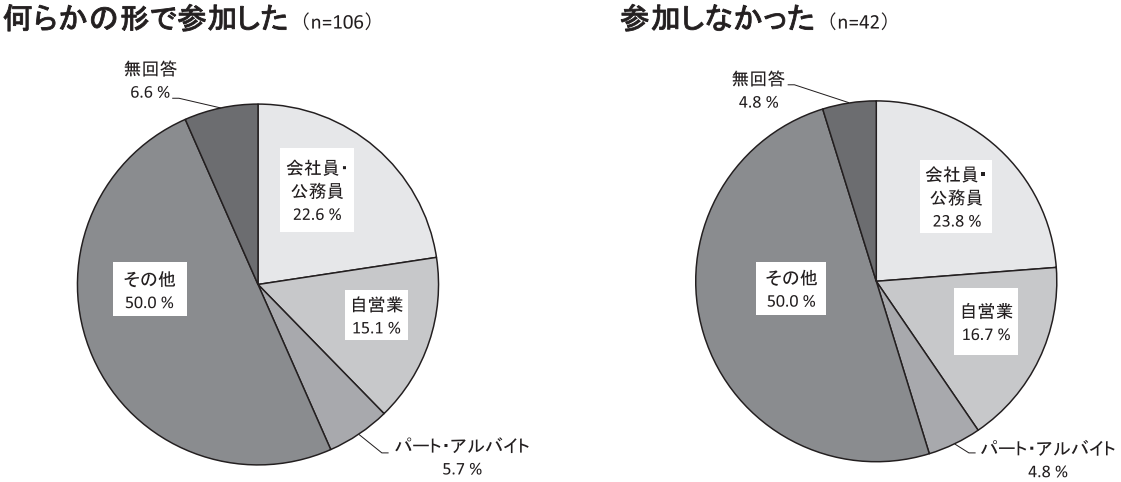

図22　職業

アンケート調査結果から以下のことが確認された。

第1に，芸術祭は移住者や，市外から珠洲市と多様に関わる人びとを増やすきっかけになったと思う住民が7割以上であること，

第2に，上記1を仮定した場合，芸術祭をきっかけにしたツーリズム（アートツーリズム）の可能性について，芸術祭に参加した者は8割以上が期待しており，芸術祭に参加していない者も5割弱が期待していること，

第3に，アートツーリズムに組み込みやすい観光資源としては，芸術祭，祭り，伝統文化・歴史の順で挙げており，芸術祭に参加した者は，参加しなかった者よりも芸術祭を観光資源として挙げる比率が高いこと，

第4に，芸術祭に参加した者は，アートツーリズムが開催されることにより，地域の活性化や特産品販売など売上が得られるといった経済的効果や，珠洲市の魅力を発信することに加え，市外から珠洲市と多様に関わる人びとが増えるなどの社会的効果が生まれ，自信と誇りが高まると思う者が5割以上であること，市民の幸福度が向上すると思う住民が4割以上であり，芸術祭に参加しなかった者よりもアートツーリズムに対して肯定的である傾向にあること，

第5に，芸術祭の参加した者は，それがきっかけで市内外の住民や観光客と話し合い，知り合い，交流が増えていると同時に，アーティストと一緒に作品を制作することなどで，様々な交流が生まれるとこと，さらに，持続可能な地域の姿として，「若者の定住」を挙げる比率が高い。

(3) インタビュー調査の目的と方法

アンケート調査と並行して，一般住民より積極的にかかわりを持った住民を対象に，「スズ・シアター・ミュージアム」

でガイドサポートを行っている4名と「アートバス」でのガイドのサポート活動をしている6名ならびに「飲食・宿泊業」で活動している5名に対する3回のグループインタビューを2022年1月～2月に実施した。

(4) インタビュー調査結果

1) シアターミュージアム（大谷地区）ガイドサポート参加者

表1　シアターミュージアム（大谷地区）ガイドサポート参加者

	Mさん	Yさん	Rさん	Mさん
属性 性別	老人会会長・76歳 （男性）	老人会・71歳 （男性）	婦人会会長・69歳 （女性）	婦人会・66歳 （女性）

スズ・シアター・ミュージアム[6]（大谷地区）ガイドサポート参加者へのグループインタビューにおいては，芸術祭や，芸術祭をきっかけにしたツーリズム（以下「アートツーリズム」という）を通して，地域の誇りや，楽しみ，感謝，幸福感に繋がることが述べられた。「祭り」や「よばれ」[7]など地域の伝統・文化・風習として，珠洲の住民は自宅に多くの人びとを迎え入れてきた経験により，他者を受け入れ，もてなすことに鍛えられているという意見があった。さらに，芸術祭は移住者や，市外から珠洲市と多様に関わる人びとを増やすきっかけになると仮定した場合，芸術祭をきっかけにしたツーリズム（アートを活用した観光）の可能性については，大きな期待感を持っており，シアターミュージアムをはじめ，通年でアートツアーが開催できることを望む声があった。代表的なコメントは以下の通りである。

スズ・シアター・ミュージアムのガイドサポートは苦にならない。出会いがあり楽しかった。むしろ，シアターミュージアムは地域のシンボルであると思っている。大谷地区においては，約6割の人は，地域のシンボルであると言っているし，そう思っている。シアターミュージアムが出来たことに対して喜んでいる。あらためてアートの力はすごいと実感した。シアターミュージアムを鑑賞し，ミュージアムから出てくる人たちの顔がみんな「恵比寿さん（七福神の一柱）」の顔になっていた。アートというのは，人を「恵比寿さん」にする。人を幸せにする。ガイドに参加できたことに対して感謝している（Rさん）。

これまで「祭り」や「よばれ」で自宅に多くの人を迎え入れている経験があり，地域の人はオープンである。「よばれ」で多くの人を受け入れ，もてなすことについては鍛えられているので全く苦にならない。楽しい（Rさん，Mさん）。

アートツーリズムの可能性については，大いに期待する。シアターミュージアムをはじめ，通年でアートツアーが開催できるとよい（全員）。

2) アートバス（全地区）ガイドサポート参加者

表2　アートバス（全域）ガイドサポート参加者

	Nさん	Tさん	Tさん	Sさん	Yaさん	Yoさん
属性 性別	サポートスズ 理事長（男性）	元小学校教員 （男性）	サポートスズ 副理事長（女性）	Nさんの同級生 （男性）	Nさんの同級生 （女性）	Nさんの同級生 （女性）
ガイド回数	5回	8回	6回	9回	7回	9回
2017年	実績あり	実績あり	実績あり			

アートバス（全域）ガイドサポート参加者へのグループインタビューにおいては，アートバス参加者（県外参加者）の特徴として，芸術作品の鑑賞だけではなく，珠洲の魅力に惹かれて訪れるリピーターがいることが示された。また，芸術祭やアートツーリズムを通して，多様な人々と交流・交感を楽しむだけでなく，地域への誇りや愛着を再認識したことが明らかになった。さらに，アートツーリズムの可能性については，移住者の増加を呼び込むことを狙いとして大きな期待感を持っており，今後，戦略的な取り組みへの意向があった。代表的なコメントは以下の通りである。

県外の参加者の方には，アート鑑賞だけではなく，珠洲への思いが強いという方もいる。リピーターが多かったことも嬉しかった（Tさん）。

ガイド活動をやってみて楽しかった。楽しい思いをさせてもらった。いろんな人との交流ができ，また地域の良さを話したり，参加者の皆さんに楽しんでもらえてよかった（全員）。

コロナ禍という制約のなかに芸術祭に重みがあった。いろんな制約の中にいながら，芸術祭は一年延期したが，開催が実現したことが感動的だった。参加者に喜んでもらいたいという思いや，地域の良さ，楽しさは，前回（2017年度）とは違った思いがあった（Tさん）。

全く知らない人と出会えること，そして会話ができることが楽しい。このイベントは健康増進にも貢献している。芸術祭やアートバスを通じて，珠洲は田舎者という意識をものすごく変えてくれた。珠洲に対して誇りや愛着を持てた（Nさん）。

芸術祭やアートツアーをきっかけに移住者が増えてくるという可能性はある。アートツーリズムの可能性について大いに期待する（全員）。

移住者を呼び込むことを狙いとして，戦略的にやってみてもよい。次回の芸術祭でも，アートバスのガイドサポートを予定している。ガイドと参加者が一緒に芸術祭のツアーを楽しむ雰囲気があればお互いが嬉しい瞬間になるのだろう。仲間意識がうまれる。あと，アーティストとの連帯感も育まれる。アーティストと接するとエピソードがあれば，色々話せるだろう。サポーターとして，芸術祭の制作過程から参加できるとよい（Nさん，Tさん）。

3）飲食業・宿泊業・道の駅（全地区）参加者

表3　飲食業・宿泊業・道の駅（全地区）参加者

	Tさん	Iさん	Sさん	Oさん	Sさん
業種 性別	宿泊 （男性）	宿泊 （男性）	飲食・宿泊 （男性）	飲食 （男性）	道の駅・観光協会 （男性）

飲食業・宿泊業・道の駅（全地区）参加者へのグループインタビューにおいては，芸術祭開催後の地域の変容や，住民の誇り・自信・連帯感の醸成が示された。また，芸術祭を通して，持続可能な観光の実現に期待する意見もあった。アートツーリズムにより，多様な人々と交流・交感を楽しむだけでなく，地域への誇りや愛着を再認識したことが明らかになった。さらに，珠洲の強みとして，SDGsの各種取り組みやアートと自然環境の組み合わせがあることを共有し，地域の持続性に貢献できるものと確認した。アートツーリズムの可能性については，移住者の増加や起業・創業などを促すことを目的として大きな期待感を持っていることが明らかになった。代表的なコメントは以下の通りである。

宿では，大学生の求人を募集したところ，募集人員が52.3倍だった。400人以上から応募があった。このことからも，芸術祭の開催以降，芸術祭を開催している街に行ってみたいという，ムードが全体的にある。芸術の特性は面白いもので，性別年齢を問わず応募してきている。特に，女性が多い。

芸術祭を開催したことによって，共通の話題が出来た。保育園・幼稚園児からおじいちゃん，おばあちゃんまで共通の話題ができたことは非常によいこと。マスコミが珠洲のことを，どんどん良いように言ってくれる。そこで珠洲の人に誇りが生まれる。われわれの子ども時代とは全く異なる珠洲の内容になっている。そういった意味ではお金に換えられない市民感情が一つになりやすい。自信が市民に醸成されたと思う（Tさん）。

このコロナで旅行者の意識もだいぶ変わった。ただ単に旅行に行くだけから，旅行の中に目的意識がないと行くだけ無駄というようになってきた。サスティナブル・ツーリズムとか様々に言われているように，受け入れ側も責任を持って受け入れる体制をつくらなければならないし，来る方もそれなりに下準備をして，そこで自分たちが何をやるのかということを考えながら来るようになってきた。そのような意味において，芸術祭は受け入れ側も芸術祭に対して受け入れる，来る側も芸術祭を見に来るついでに，周辺で何が行われているかを見極めるために来る。珠洲のファンが増えてくる。このような好循環になれば非常に良い。最初は「芸術祭は何をやるのだ？」という疑念が払しょくされて，2回目で「また芸術祭をやるんだ」，3回目では「是非やるんだ」という意識が変わってきたのが大きい。すずなりでも絶対やるんだという心持ちで観光戦略や営業戦略の検討を進めている（Sさん）。

時間がかかっても良い所をどんどん増やしていく。体制をつくっていくしかない。いまは第3回目の芸術祭に向けての目玉を考えている。第2回目はスズ・シアター・ミュージアムができた。ミュージアムがどうしても必要だった。ほしかった。今後は本当の美術館を造る計画を立てないといけないと考える（Tさん）。

珠洲では，割といろんなことをやっているというか，やりたがっている。SDGs未来都市や「SDGsラボ」があるというのが一つの魅力である。今はラボの方で一貫して環境教育をすることで，学生の気づかせに対する説明ができるようになった。自然豊かな場所のなかで芸術作品がそのまま残っているということで，皆さんに見てもらって，だからこそやっているんだ，というこ

とを気づいてほしいという売り込みができるようになった。環境教育とアートは最強の組み合わせである（Sさん）。

アートツーリズムの可能性について大いに期待する（全員）。

芸術祭によって売り上げを伸ばすお店の事例がどんどんできるとよい。そうすれば若い方も就職しやすい。さらに若い人が起業できるともっと良い。先行でやっている芸術祭の開催地域も成功事例が実証済である。われわれは後追いで良い所を取り込んでゆきたい（Tさん）。

インタビュー調査結果から以下のことが確認された。

第1に，元来珠洲の住民は，「祭り」や「よばれ」で自宅に多くの人びとを迎える伝統・文化・風習があり，他者を受け入れ，もてなす寛容性が高いこと，

第2に，芸術祭やアートツーリズムに何らかの形で参加，または関わることによって，地域への誇りや愛着，アイデンティティの形成はもとより，楽しみや感謝，健康，幸福感を得る効果がみられたこと，

第3に，芸術祭やアートツーリズムによって，住民と観光客同士だけでなく，アーティストとの交流・連帯感が育まれること，

第4に，芸術祭やアートツーリズムの可能性について，特産品販売などの売上増加や，移住者や多様に関わる人びと（関係人口）の増加，起業・創業の契機になるなどの期待感を持っており，これらの人びとを呼び込むことを狙いとして戦略的に取り組む意向があること，

第5に，芸術祭と豊かな自然環境を通して，住民と観光客が共創する持続可能な観光やSDGsの実現可能性が示唆された。

Ⅳ．まとめに代えて

本研究では，珠洲市が国際芸術祭やアートツーリズムに取り組む経緯を概観した上で，「アートツーリズムは地域の持続的発展に貢献するか？」の問題意識から地域住民の意識の変化を明らかにする目的でアンケート調査とインタビュー調査を行い，アートツーリズムが，具体的に地方都市や過疎地域にどのような影響をもたらしていくのかという点を分析した。

実地調査の結果から，アートツーリズムに関係する中心人物（インタビュー調査対象者）だけでなく，一般の地域住民にとって，アートツーリズムに対してかなり好意的であり，特に，芸術祭に参加した者の方が，参加していない者よりもそうであることが確認される。さらに，アートツーリズムを行うことにより，地域の活性化や特産品販売など売上の増加といった経済的効果だけでなく，珠洲市の魅力を伝える情報発信や，移住者や市外から多様に関わる人びと（関係人口）が増えるといった社会的効果が期待されることに加え，住民の自信や誇り，幸福度が高まることも確認された。また，インタビュー調査からみてとれるように，芸術祭やアートツーリズムに何らかの形で参加，または関わることによって，地域への誇りや愛着，アイデンティティの形成はもとより，楽しみや感謝，健康増進，幸福感を得る効果がみられたこと，アートツーリズムの担い手たちがアートツーリズムに対して意識が高まっていること，地域の持続性に寄与するアートツーリズムの可能性も確認できた。

このような住民の認識を「政策」という観点から読み解いていくと，近年の動向として，地方への関心・移住意向を示す大都市圏在住者が増加傾向にあるなか，芸術祭やアートツーリズムを機に，珠洲市では，移住地として選択する人びとや多様な関係人口を受け入れ，これらの人びとの刺激や幸福感を高めることができ，移住活動の成功に間接的な影響をもたらす可能性が示唆される。実際に，珠洲市においては，これまで人口の転出が転入を上回る転出超過がずっと続いてきていたが，芸術祭開催後の2021年の上半期に転出120人に対し転入131人と11名の転入超過となった[8)]。

この結果からも，色濃く残る伝統文化を大切にしながら，芸術祭やアートツーリズム，そして，SDGs の取り組みをはじめする先進的な取り組みに挑戦する珠洲市の魅力に刺激や面白さ，可能性を感じ，引き寄せられた移住者，関係人口の増加が一定みられ[9)]，移住者の存在が地域の住民に与える影響も少なからずあると考えることができる。例えば，芸術祭やアートツーリズムを契機に珠洲市に移住した者は，単に地域に移り住んだだけでなく，芸術祭やアートツーリズムを運営・支援する重要な一員として存在することも確認できた[10)]。このように，芸術祭をきっかけとするアートツーリズムは，文化政策や観光政策のみならず，移住政策にも結び付けられ，珠洲市の文化多様性と持続的発展において様々な意義を見いだすことができるといえる。

一方で，アンケート調査からみてとれるように，芸術祭に参加していない者が参加した者よりもアートツーリズムに対する肯定感が低いことも確認できた。このことから，アートツーリズムを推進していくうえで，いかに住民の理解を深めていくかにおいては，芸術祭に参加しなかった（あるいは参加する機会がなかった）者に対して，実際にマイクロバス等で作品を巡ったり，アーティストの制作現場を訪れる「市民・市内バスツアー」のようなものを開催するなど芸術祭を直に感じる案内や説明，アーティストとの交流機会を設ける施策が考えられる。アートツーリズムが移住者へ与える影響についての考察は今後の課題としたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり，珠洲市，奥能登国際芸術祭実行委員会の皆さまをはじめ，関係者の皆さまに御協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

「注」

1）アートツーリズムは，芸術作品を巡ることで地域の文化に触れるアートを活用した観光活動であり，ツーリストと地域住民とが感動や体験を共有することにより新たな価値を生み出し，地域の持続的発展に貢献するクリエイティブツーリズムの導入的形態として位置付けることが出来る。
2）奥能登国際芸術祭実行委員会，珠洲市
3）『奥能登国際芸術祭2020＋』，北川フラム，奥能登国際芸術祭実行委員会，2022
4）『奥能登国際芸術祭2020＋公式ガイドブック』，『奥能登国際芸術祭2020＋公式記録集』，珠洲市ホームページによる
5）作品名の後に表示された「(2017)」は奥能登国際芸術祭2017で作られた作品であり，常設展示されている。
6）スズ・シアター・ミュージアム「光の方舟」:「大蔵ざらえ」で珠洲市内の約70軒の家々から集められた民具，日常生活の品々が一堂に集結し，民具と現代アートが融合した，世界初の「モノが自ら語りだす」劇場型博物館。
7）秋祭りで振舞われる「よばれ」料理。地元で採れた野菜や魚介類など旬の食材をふんだんに使用した御膳料理を客にもてなす。
8）珠洲市への聞き取り調査より（2022年1月21日）。
9）珠洲市への聞き取り調査より（2022年10月20日実施）。
10）一般社団法人サポートスズ・スタッフへの聞き取り調査より（2022年8月24日実施）。

［参考文献］

1. 赤坂憲雄，鶴見和子（2015）『地域からつくる―内発的発展論と東北学』藤原書店
2. 池上惇（1993）『生活の芸術化―ラスキン，モリスと現代』丸善
3. 小田切徳美（2009）『農山村再生』岩波書店
4. 小田切徳美（2014）『農山村は消滅しない』岩波書店
5. 太下義之（2009）「クリエイティブ・ツーリズムによる地域振興」三菱UFJリサーチ＆コンサルティング https://www.murc.jp/report/rc/column/search_now/sn090501/（2022年9月26日最終閲覧）
6. 大橋昭一（2017年）「サスティナブル・ツーリズム原理論の展開過程－サスティナブル・ツーリズムの可能性を求めて」，『和歌山大学・観光学』17号
7. 大橋昭一（2018年）「「貧困克服」のためのサスティナブル・ツーリズム論－プロプアツーリズム論の進展」，『和歌山大学・観光学』18号
8. 川勝平太，鶴見和子（2008）『「内発的発展論」とは何か―新しい学問に向けて』藤原書店
9. 北川フラム（2014）『美術は地域をひらく』現代企画室
10. 北川フラム，奥能登国際芸術祭実行委員会（2017）『奥能登国際芸術祭2017公式ガイドブック』現代企画室
11. 北川フラム，奥能登国際芸術祭実行委員会（2018）『奥能登国際芸術祭2017』現代企画室
12. 北川フラム，奥能登国際芸術祭実行委員会（2021）『奥能登国際芸術祭2020＋公式ガイドブック』現代企画室
13. 北川フラム，奥能登国際芸術祭実行委員会（2022）『奥能登国際芸術祭2020＋』現代企画室
14. 佐々木雅幸（1997）『創造都市の経済学』勁草書房
15. 佐々木雅幸（2001/2012）『創造都市への挑戦―産業と文化の息づく街へ』岩波書店
16. 佐々木雅幸（2009）「文化多様性と社会包摂に向かう創造都市」佐々木雅幸・水内俊雄編『創造都市と社会包摂』水曜社
17. 佐々木雅幸（2017）「クリエイティブ・ツーリズムの成立条件と創造都市連携の可能性」科研費基盤研究成果報告書

18. 佐々木雅幸（2014）「創造農村とは何か，なぜ今，注目を集めるのか」，佐々木雅幸，川井田祥子，萩原雅也編『創造農村』，学芸出版社
19. 佐々木雅幸，竹谷多賀子（2018）「創造都市ネットワークの展開とその可能性」，『同志社大学経済学論叢』第69巻第4号，同志社大学経済学会
20. 敷田麻美（2022）「地域再生におけるよそ者の分類と変容に関する研究：資源所有と商品・サービス創出による分類モデルの提案」，『日本地域政策研究』2022-03，日本地域政策学会
21. 珠洲市（2018）『SDGs 未来都市計画』
22. 竹谷多賀子（2019）「創造農村と維持可能な社会の実現」，佐々木雅幸，敷田麻実，川井田祥子，萩原雅也編『創造社会の都市と農村』水曜社
23. 竹谷多賀子（2021）「創造都市とクリエイティブツーリズム―金沢における文化の多様性と持続性の視点から」，『日本都市学会年報』VOL.54，日本都市学会
24. 田中輝美（2017a）『関係人口をつくる―定住でも交流でもないローカルイノベーション』木楽舎
25. 田中輝美（2017b）『よそ者とつくる新しい農山村』小田切徳美監修，筑波書房
26. 田中輝美（2021）『関係人口の社会学』大阪大学出版会
27. 寺西俊一，石田信隆，山下英俊編（2018）『農家が消える―自然資源経済論からの提言』みすず書房
28. 鶴見和子（1996）『内発的発展論の展開』筑摩書房
29. 鶴見和子（1989）「内発的発展論の系譜」，鶴見和子，川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会
30. 平田オリザ（2016）『下り坂をそろそろと下る』講談社
31. 広井良典（2009）『コミュニティを問い直す』筑摩書房
32. ファン・パストール・イヴァールス「金沢グリーンインフラ・ブルーインフラの創出：都市生態系サービスの保全と基礎，菊地直樹，上野裕介編『グリーンインフラによる都市景観の創造』
33. 藤田直哉編（2016）『地域アート美学／制度／日本』堀内出版
34. 文化経済学会＜日本＞編（2016）「文化経済学　奇跡と展望」ミネルヴァ書房
35. 文化庁（2004）文化審議会文化政策部会 文化多様性に関する作業部会 報告 ―文化多様性に関する基本的な考え方について―
36. 真子和也「持続可能な観光をめぐる政策動向―コロナ時代の観光を見据えて―」国立国会図書館調査及び立法考査局，調査と情報，第1110号，2020
37. 馬奈木俊介（2017）『豊かさの価値評価』中央経済社
38. 馬奈木俊介，池田真也，中村寛樹（2016）『新国富論―新たな経済指標で地方創生』岩波書店
39. 宮本憲一（1982）『現代の都市と農村―地域経済の再生を求めて』日本放送出版協会
40. 宮本憲一（1989・2007）『環境経済学』岩波書店
41. 宮本憲一（2006）『維持可能な社会に向かって』岩波書店
42. 宮本憲一（1998）「農村と都市の共生を求めて」，宮本憲一，遠藤宏一編『地域経営と内発的発展―農村と都市の共生をもとめて―』農山漁村文化協会
43. Ankei,Y., 2002, *Community-based Conservation of Biocultural Diversity and the Role of Researchers :Examples from Iriomote and Yaku Island.Japan and Kakamega Forest,West Kenya. Yamaguchi Prefectural University*, Bulletinof the Graduate schools3:pp13-23.
44. Benhamou,F .and Peltier,S., 2007, *How Should Cultural Diversity Be Measured ? An Application Using the Frenchi Publishing Industry*, 31 J Cult.Econ.85.
45. Anita Kangas et al eds, 2020, *Cultural Policies for Sustainable Development*, Routledge
46. Crispin Raymond ,2013, *What's in a Name? The Origins of The Tear "Creative Tourism"*, In Creative Tourism-A Global Conversation, edited by Rebecca Wurzburger , The City of Santa Fe:Sunstone Press
47. Elena Paschinger, 2015, *THE CREATIVE TORAVELER'S HANDBOOK*, UK:Full Flight Press
48. Florida , R .（2002）*The Rise of the Creative Class*, New York : Basic Books 井口典夫訳（2008）『クリエイティブ資本論』ダイヤモンド社）
49. Greg Richards , 2013, *Creative Tourism and Local Development*, In Creative Tourism-A Global Conversation ,edited by Rebecca Wurzburger , The City of Santa Fe:Sunstone Press
50. Landry , C .（2000）*The Creative City : A Toolkit for Urban Innovators*, London : Comedia（後藤和子監訳（2003）『創造的都市』日本評論社）
51. Melanie K. Smith & Mike Robinson ed, 2006, *Cultural Tourism in a Changing World ― Politics*, Participation and（Re）presentation, Clevedon , Buffalo, Toronto：Channel View Publications
52. Melanie K. Smith & Mike Robinson ed,阿曽村邦昭・阿曽村智子訳「文化観光論－理論と事例研究―古今書院，2009
53. M. Robinson & David Picard,2006, *Tourism, Culture and Sustainable Development*, UNESCO Cultural Tourism Division, Paris, UNESCO
54. Nancy Duxbury, 2020, *A Research Agenda for Creative Tourism*, Glos:Edward Elgar
55. OECD, 2014, *Tourisum and the Creative Economy*, Paris:OECD
56. Rebecca Wurzburger, 2010, *CREATIVE TOURISM A Global Conversation*, The City of Santa Fe :The City of Santa Fe

57. Throsby.D., *Economics and Culture*. Cambridge University Press,2001,中谷武雄・後藤和子監訳『文化経済学会入門―創造性の探求から創造再生まで』日本経済新聞社，2014

［サイト］
1. サンタフェクリエイティブツーリズム http://www.santafecreativetourism.org/（2022年9月29日最終閲覧）
2. 金沢大学 地域連携プロジェクト / 能登 里山里海マイスター育成プロジェクト http://www.crc.kanazawa-u.ac.jp/meister/（2022年9月28日最終閲覧）